

個人を見つめる

友定 啓子

攻撃の対象転化

とうとうこの小論もこれが最後になった。現代幼児論というからには、攻撃性の問題だけで終わっていないはずはないのだが、私はいつまでたってもこのテーマから卒業できないでいる。

私の一番の課題は、子ども達の以前とは質の違う攻

撃的行動をどうとらえるかということだった。どのよう違うかといえ、相手かまわないということである。攻撃するからには、その相手との間に何かの事情があつて、あるいは目的があつての行動だと思つてきた。だから、攻撃行動に出てもその原因なり事情の整理をすることで、本人も相手もある程度納得して治めることができると思つていた。

ところが、何もしない学生達に遠慮なく攻撃する、あるいは反撃されないと見ると、見知らぬ人にも突然攻撃をするというわけのわからない行動が目につくようになってきた。今回取り上げることはしなかったが、これとよく似たもので、攻撃はしないけれど、自分が不機嫌になってしまうという子どもがいる。相手に対して一方的に怒りを感じているというのが共通する点だ。たまたまその対象になった人は理不尽であるし、解決のしようがない。その怒りを本来向けるべき相手ではなく、別の者に向けられるという対象の転化が行われているのである。本人もどうしてそうなるのかわからないでいて、問題は解決しないままに、否定的な行動だけが残る。それが尾を引いて、結果的に他者との関係まで壊してしまう。幼児の段階でこれを自覚することは困難である。

これで一番問題なのは、大人あるいは他者一般に対する信頼感を作り出せないということだ。同時にそれは自分に対する信頼も持てないということにつながる。

る。自己および他者への不信任感・被害感・防衛感を絶えず引きずっている。そのことが現実の人間関係に悪循環となつてふくらんでいく。この状態から抜け出すには、その子が心から信頼できる大人と長い時間が必要である。

子どもの特権としての暴力

基本は同じだと思うのだが、そこから発生したもう一つの攻撃行動がある。それは、子どもだから大人には何をやっても許されるという、子どもの側の特権感情である。笑つて攻撃をしかけてくるというのがそれである。どこかで大人を試しているのだと思う。これはまっとうに対決するしかない。

生徒が教師に殴りかかっておいて、「できるものなら反撃して見ろ。体罰教師で訴えてやる」と居直るのと同じ発想である。人として許されないこと、他者を傷つけることでも、子どもだからと大人が見逃し、許し、認めているとそうなる。痛いときには痛いとい

い、嫌なことは嫌だ、応えられないと、人として率直に子どもに対応する必要がある。自分は大人だからと譲ってばかりいると、子どもは大人の気持ちに不感症になってしまう。大人にも気持ちがあるということすら気付かない。

そういえば、神戸のあの少年は、愛されない子どもでもあつたけれど、十四歳までは人を殺しても死刑にならないと言っていた。

大人不信からの攻撃行動と、子ども特権としての攻撃行動には、共通点がある。それは大人と子どもの関係が力関係あるいは取り引き関係のところに出現するということである。大人が強ければ大人不信、子どもが強ければ子ども特権というわけだ。そこにはお互いに相手を理解するということがない。幼児期からそういう親子関係しか体験していないのは不幸だ。

教育の鬼門

この連載は「学級崩壊」言説に対する危機感から始

まった。最後にその問題に戻らなくてはならないと思う。私の危機感は、小学校での子どもの荒れた姿が公開されるやいなや、その矛先が幼児教育界における「自由保育」に向けられたことであつた。これはマスコミでも、小学校現場でも、大学人にもあるいは教育評論家あるいは実践家からも期せずして巻き起こってきた。

幼稚園や保育園で自由に遊ばせておくからこうなるのだ、もつとちゃんとしつけをしろという大合唱だ。「自由に遊ばせておく」ことに対する誤解が入っているので、反論はまことにやっかいである。

私だってそう言われれば、幼児教育の場において、「自由保育」を支持する人間として、小学校の硬直した教育システムこそ問題ではないか、あるいは家庭の問題だ、こつちこそたいへんなんだといったくなる。しかし、それでは問題は何一つ解決しない。

先日、「小学校に入ったら、自由だの権利だのはないと子ども達に言い渡すべきだ」という発言に出

会った。こう思っている人は少なくないと思う。私はこういう発言に弱い。それはまちがっていると思うのだが、どう反論していいか、糸口がつかめない。それと同時に言ってもむだだという思いがして、つい口をつぐんでしまうところがある。

何がまちがっているのかというと、基本的に力で子どもを従わせようとするところだ。権力主義は決して相手を理解しようとはしない。なぜ、その子が自分の要求する行動をしないのか考えようとせず、相手を自分の思うようにすることだけを考える。たとえ動機や目的が「それがあなたのためだ」というものであっても、方法論が間違っている。相手の意志や感情を無視している。それは支配そのものだ。教育の鬼門ともいえる。そのやり方が相手をつぶす。人として生きて

いく上で、もっとも大事な自尊心と、自分で判断する能力を奪う。そしてそれが本人の意志を無視したものであれば、その子は、自分を捨てて生きるしかない。時には意欲や感情まで捨てる。意欲や感情を奪われた人間は、他者のそれを認めることができない。

大人が子どもの意志を越えて力を使ってもいいのは、あるいは使うべきなのは、生命が危険な時だけだと私は思う。

子どもの意志と大人

子どもの意志を尊重してと言うと、「甘い」と言われる。違う。とんでもない。子どもの意志を尊重するとは子どもの言いなりになることではない。子どもの意志や思いと自分の思いや意向を絶えず同等に検証することだ。甘いどころではない。何度も自分

が問い返される。自分が望んでいることは正しいのか、していることは相手にどういう意味を持つのか、自問していなくては



ならない。このことをわかってもらうにはどうしたらいいのか、自分はそれをわかっているのかを問い、時にはあきらめなければならないこともある。自己を不問にし、つべこべ言わずに言うことを聞きなさいと言っている方が、よっぽど楽だと思う。

私は、自分の子どもとの関わりを通してこれを体験した。子どもの思いを知るのは楽しみでもあったが、また、子どもと自分の考えや感覚が違うことに気付くたびに自分の考えを相対化させられてきた。親の不安を先行させて、一方的に命令してしまい、あとで泣いて謝ったこともある。しかし、謝ったことで親子の関係は悪くはならず、むしろ前進した。

保育の現場でも、その子を信じてあたると、子どもが全力を出して応えてくれるということを何度も見た。子どもが自分で判断する。反対に、相手の気持ちを無視して、こちらの言うとおりにさせようとしても、逃げられてしまう。

保育者の資質は感性だとよくいわれる。表現のつた

ない幼児の気持ちを理解することを重要視するからである。教師の資質においてその点はどれだけ重視されているのだろう。むしろ子どもに言うことを聞かせるスキルだけが評価されているのではないか。学校は公権力だと言ってしまうがそれまでだが。それならば、あんなに拘束させられては、子どもはたまらないと思う。

学校が楽しいのは、先生と友達が心を通わせて様々なことをし遂げるところにあると思っている。その力をもっと大事にしていきたいと思う。この論考の最初に、学校は子どもと大人が生活するところ、その中で様々な文化や知識を伝えていくところと切り換えた方がいいのではないかと書いた。それは今でも変わらない。我が子にどんな子ども時代を送らせてやりたいかと考えれば、一日一日がそのままで充実した日々であってほしいということである。悲しいことや苦しいことが起こっても、それを友達や先生と共に乗り越えられるれば、生きていく力になる。土台さえ作れば子ど

もは持つて生まれた力でのびていく。

力関係からの脱却

「学級崩壊現象」は、家庭が原因でも幼児教育が原因でも小学校でも中学校でもないと思う。現代の大人と子どもの関係が力によるものであることが原因だと思う。

「自由保育」が非難されるのは、ほかのところで力できちんと(?) やっているのに、そこだけが権力的でないで、崩れたのだという論理だ。子どもに拒否権を与えてはいけないという考え方だ。全部を一貫して、大人優位でやればほころびないというわけだ。筋は通っている。しかし、逆の論理も成り立つ。ほかのところの権力主義が、自由保育を体験することで、破綻をきたしているのだと。

実はお気づきのように、ほころびているのは学校だけでない。家族が今、ほころびているのである。力による親子関係のもとで育ってきた子ども達が成人し、

家庭を持ったときに、あるいは子どもと直面したときに、人間としてのしなやかさが消えてしまっているという問題だ。

この間、子どもと暴力をテーマにした書物を何冊か読んだ。読みながら、子どもが暴力をふるうよりも、暴力をふるわれることの方が深刻なのだということを改めて、認識させられた。

大人はたまに子どもに暴力をふるわれると、声高に叫ぶ。私もその一人かも知れない。子どもに底知れない悪意があるのではないかと不安になる。しかし、現実には、その何倍もの悪意が子どもに向けられている。としたら、子どもが大人に底知れない不信感を抱



くのは当たり前ではないか。

だから、ああだこうだと子どもを論評する前に、大人の権力主義を払拭する方がこの解決には結びつくと思う。子どもとの共存を心底願うこと、自分の思いのままに子どもをし向けるという、親権力・教師権力を脱却する必要があると思う。

子どもによりそえるように

なぜ、教師は権力を必要とするのだろうか。それはひとりの教師がおおぜいの子どもに、一度に同じことを伝えなければならないからだ。伝えることが多すぎて、それを年中していなければならないからだ。困っている子どもがいると気付いても、ほかの子ども達がいいて授業をやめるわけにはいかない。それを繰り返して、クラスで授業についてこれない子が何割かいるという常態は空しい。ドキュメンタリー番組で、クラスを抜け出す子どもに、授業がわからないのなら、静かに自由帳でも書いていればいいと先生が言っていた。

静かにしていさえてくれたらいいというのだろうか。ほんとうはこの子に誰かについて教えてやってほしいと思っっているはずだ。子どもだってその方が満足するだろう。学びたいし、知りたいと思っっているのだから。

文部省は、学級崩壊の大きな要因として、教師の指導力を上げていた。あまりに硬直化した子どもへの指導が原因であると。確かにそうかもしれないが、そうしなければやってこれなかった教師の状況というものが背景にあると思う。それでなんとか今まで持ってきたのだ。それが今、現代の子ども達に合わなくなってきた。

日本は経済大国だというが、日本の教育はまだ貧しいと思う。幼稚園では、三十五人の子どもを相手にひとり保育者は走り回っている。今の水準を下げたくないと言うのなら、教師や保育者の数は少なくとも倍は必要だと思う。学校の学びのスタイルをもっと柔軟にしていく条件がほしい。教師の教える発想も豊かにし

てほしい。その条件を整えなければ教師も成長できない。私のところには、教師希望の学生が大勢いる。その夢が無惨にも破れていく姿を毎年見るのは忍びない。教育にお金と人をつぎ込んでほしい。子どもが少なくなくてきているから、教師はいらないなどとはいえない。これだけ子どもが育ちそびれているのだから、専門的に子どもに関わる人はもつともつと必要だ。これはもう社会的合意になっていると私は思う。

子どもの攻撃性を考えながら、最後にたどり着いた結論は、問題を一般論としてとらえるのではなく、具体的にその子どもに寄り添って理解し、支えていくを増やすこと、その体験を語り合えるようにしていくことが、今最も必要だということである。

(山口大学)

参考文献

- (1) 森田ゆり『子どもと暴力―子ども達と語るために』岩波書店 一九九九年
- (2) 山崎晃資編『子どもと暴力』金剛出版 一九九九年
- (3) 保坂渉『虐待―沈黙を破った母親たち』岩波書店 一九九九年
- (4) 齋藤孝『ムカツク』構造』世織書房 一九九八年
- (5) ビエーロ・フェルツチ著 泉典子訳『子どもという哲学者』草思社 一九九九年
- (6) 本田和子『変貌する子ども世界』中央公論新社 一九九九年
- (7) 村田陽子・友定啓子『子どもの心を支える―保育力とは何か』勁草書房 一九九九年